

アイリス・マードック 工藤昭雄訳

切られた首





アイリス・マードック

切られた首

工藤昭雄訳 新潮社版



Title: A Severed Head

Author: Iris Murdoch

Original Copyright 1961 by Chatto & Windus Ltd.

Translator: Akio Kudo

Japanese Translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co., Tokyo.

© 1963 Printed in Japan.

切られた首

1963年1月30日発行

1972年1月15日五刷

訳者 工藤昭雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町71 (郵便番号162)

電話東京260局1111

振替東京808

定価700円

二光印刷・新宿加藤製本

乱丁本はお取替えます

切
ら
れ
た
首

「ほんとに知らないと思う？」とジョーは言った。

「アントウニアが？　ほくたちのことを？……知ってやしないさ」

ジョーは黙っていた。しばらくして、「そう」と言った。このそっけない言葉づかいが、いかにも彼女らしい。しぶとさをよくあらわしている。非情というより、誠実さを物語るしぶとさである。彼女が私との関係を率直に認めているのが快かった。こういうすばらしく賢い女が相手だからこそ、私は妻を欺いていられるのだ。

ジョーの部屋。私は彼女と抱き合うような恰好でガス・ストーブの前に横たわっていた。彼女は私の肩に寄りかかり、私は彼女の髪の毛の一房をもてあそんでいる。黒い髪に赤みがかった純粹の金髪が沢山まざっているのを見て、驚きを新たにす。彼女の髪は、馬の尾のように癖がなく、それに劣らぬくらい剛く、そして非常に長い。暗くしたままの部屋には、ストーブとマントルピースの上の赤い三本のろうそくだけが光を投じている。三本のろうそく、それに手あたり次第に置いてある、とげとげしい葉のついたひいらぎの小枝。いつもなにかとりとめのない印象を与えるジョーの、これが精一杯のクリスマスの飾りつけだった。とはいえ、部屋の中は、かいま見た洞窟の

宝庫のように華麗である。ろうそくの前には、祭壇のように、私の贈った一對の中国風の線香立てが立っていて、小さい青銅の武人が火の点った線香を槍のようにかざしている。灰色の香煙が、霞のようにたなびき、ろうそくの焰にあおられて、回教苦行僧の踊りのように急激に弧を描き、暗い天井へ立ちのぼっていく。カシミール罌粟と白檀の匂いが息苦しく充満する。あたりに、交換した贈物のけばけばしい包装紙がちらばっている。食べ残しとシャトー・サンシー・ド・パラベール一九五五年（葡萄酒の名前）の空壺をのせたまま、テーブルが片隅に押しやられている。私は昼食時から来ていたのだ。カーテンでさえぎられた窓の外では、霧に閉ざされ、冷え冷えとしたロンドンの午後が終り、黄昏れようとしている。が、真昼でさえ真に明るいとはいえないよどんだ光を、薄霧がまだほの白く包んでいる。

ジョージーは溜息まじりに寝返りをうち、私の膝に頭をのせた。彼女はもう身仕舞を直している。ただ、靴下と靴だけはまだ履いていない。「何時にお帰りになる？」

「五時頃」

「あんまり時間を気にするところを見せないでね」とジョージーは言った。彼女は、こういう表現によってのみ、その愛情を私の胸に鋭く感じさせる。これほど気のきく情婦はまたとあるものではない。

「アントウニアの治療が五時に終るんだ。五時すぎにはヘレフォード・スクエアへ戻っていないからね。いつもその日の治療の話をしたがるし、それに二人で夕食に招ばれているんだ」私は、ジョージーの頭を軽く持ち上げ、髪をかき上げて、両方の乳房の上に拵げた。ロダンの気に入りそうなポーズだ。

「分析のほうはどんなふうなの？」

「上々の首尾さ。見つともないくらい気を入れてやっている。もちろん、面白がっているだけなんだがね。感情の転移が大いに捗っているというわけさ」

「パーマー・アンダーソンか」とジョージは、アントウニアが診てもらっている精神分析医で、アントウニアと私二人の親しい友人でもある人の名前を口にした。「そうねえ、あの人にいかれるのは私にもわかるような気がするな。利口そうな顔をしているもの。あの人にびったりの商売で、いいんじゃないかしら」

「それはどうか知らないが、君のいう彼の商売というのがぼくは嫌いなんだ。しかし、彼には何かいいところがある。いい人間というだけのことかもしれないがね。アメリカ人にしかみられないあのやさしくて、慇懃で、おとなしい、というのとはちょっと違うんだ。アメリカ人ではあるけれどもね。まやかしてない迫力があるんだよ」

「ご自分のほうこそあの人にのほせているみたいに聞えるわよ」とジョージは言った。斜にじり寄って、楽な姿勢をとり、曲げた私の膝の間に頭をのせた。

「そうかもしれない。彼と知り合って、ぼくという人間がずいぶん変わったものね」

「どういうふうに？」

「といわれても困るが、彼のお蔭でこの世の掟があまり気にならなくなったんだ」

「掟？」ジョージは笑った。「掟などお構いなしなのは昔からじゃないの」

「とんでもない！ 今だって気にならないわけじゃない。君みたいな自然児とはわけが違うんだ。いや、そうでもないかな。とにかく、パーマーはひとの感情を解放させるのがうまいんだよ」

「わたしが掟を気にしないだなんて——でも、やめておきましょう。ひとの感情を解放するとおっしゃるけど、それを商売にしている人なんかわたしは信用しないな。感情を解放させるのがうまい人は、ひとを奴隷にするのもうまい人よ。プラトンのいうところによるとね。いつもだれかに支配されたがるのが、マーチン、あなたのいけないところだわ」

私は笑った。「愛人^{ミストレス}（女支配者の意もある）がいるから、支配者なんか用はないよ。ところで、どうしてパーマーを知ってるの？ ああ、そうか、彼の妹を介してだね」

「妹」とジョージは言った。「そう、あの変り者のオナー・クラインを通してね。彼女が学生を招待したパーティーで彼を一度見かけたのよ。紹介はされなかったけど」

「どうなんだい？」

「オナーが？ 人類学者としてどうかとおっしゃるの？ ケンブリッジ大学での評判はとてもいいわ。わたしは教わらなかったけど。とにかく、たいていどこかの野蛮人を調査しに出掛けていたわ。あの人がわたしの勉学と生活の指導教授ということになっていたのよ」

「彼女はパーマーの異父妹じゃなかったかな。どうなんだろう。あの二人にはいろんな血が混っているらしいね」

「そうらしいわね。あの人たちのお母さんはスコットランドの人で、はじめアンダースンという人と結婚して、その人が亡くなったあとでクラインという人と結婚したのよ」

「アンダースンという人はよくも知っている。デンマーク系のアメリカ人で、建築か何かやっていた人だ。もう一人の父親はどんな人なんだろうね？」

「エマヌエル・クライン。当然知っていていい人だわ。相当な古典学者よ。ユダヤ系のドイツ人で

すけどね」

「学者だということは知っていたさ。一、二度バーマーから聞いたことがある。それが面白いんだ。バーマーはね、未だに継父の夢をみてうなされるんだそう。彼は妹も少々怖がついているんじゃないかと思うね。口には出さないけど」

「たしかにひとを怖れさせるような人だわ。あの人には、何か原始的なところがあるのよ。野蠻人と接触しているせいでしょうけれど。お会いになったことがあるんじゃない？」

「会ったことはある」と私はいった。「どういふ人かよくおぼえていないがね。女学者そのものといった感じだった。ああいう女たちというのは、どうしてみんなあんな顔をしているんだろうね」

「ああいう女たちだなんて！」ジョーは笑った。「今じゃわたしもその女学者なんですよ。とにかく、あの人にはたしかに迫力があるわ」

「君にだって迫力はあるが、あんな干し草の山みたいじゃないよ」

「わたしに？」とジョーは言った。「わたしなんか問題外よ。半分の迫力もないわ」

「ぼくが兄貴のほうにのぼせているというけど、君は妹のほうにのぼせているらしいね」

「あら、嫌いよ、わたしは。話は別よ」

彼女は、いきなり体を起して、髪を直し、おそろしく手早く編みはじめた。重い、編んだ髪を肩越しにゆすり上げるようにして、背中へ垂らした。と思うと、スカートと何枚かのごわごわした白いベチコートをたくし上げ、私が贈った青い孔雀色の靴下を履きはじめた。私は、途方もないもの、ばかげた衣裳や、アントウニアにはとうてい買ってやる気になれないまやかしの、悪趣味なネックレスや、ビロードのズボン、紫色の下着、私を夢中にさせる黒いすかし編みのタイツ、と

いったものをジョーギーに贈るのが好きだった。私も腰をあげ、部屋の中を歩きまわりながら、彼女が私の視線を鋭く意識しながらも、そしらぬ顔で、けばけばしい靴下を直すさまを、食いつけるように見つめた。

ジョーギーの部屋、コヴェント・ガーデン近くの路地に面した、広い、乱雑な、一間きりのアパートには、私の贈物が一杯つまっている。とりつくしまもないジョーギーの無趣味を矯めようと、私は長いこと努力したが、徒勞に終ってきた。沢山のイタリヤ製の複製画、フランスの文鎮、ダービー、ウスター、コールポート産の焼物、スポウド(一七五四—一八二七 陶藝家)、コーブランド(十八世紀の家具製作者)の作品やその他の骨董品——私は土産を持たずに来たことはないのだ——そういったものも、洗練された趣味の部屋をつくりだすどころか、私の骨折りにもかかわらず、雑然と埃をかぶっていて、古道具屋の趣を呈している。どういふものか、ジョーギーには物を所有する能力が生れつき欠けているのだ。アントウニアや私が買物をするとき——われわれはしょっちゅうそれをしたのだが——品物が、華麗で高度の統一が保たれた邸内のたまたまのたすきの中に、所を得て納まるのに反して、ジョーギーにはそういう物の始末をつける力が無いように思われる。彼女は、どんな持物でも、ひとから所望されると、たちどころに進呈するだろうし、自分の持物をおぼえてもいない。いつも乱雑な状態に放置されていて、私がくりかえし根気よく選りわけ、整理しても、一向に功を奏するようには見えない。愛するジョーギーの、この性癖には私も腹が立った。しかし、それがまた彼女の驚くべき淡泊さ、世俗的要求の欠如、の一面をなすものであってみれば、同時にそれを讚美し、愛さないではいられないのである。そしてまた、と時に私は考えた——それは、私のジョーギーにたいする関係の、私が彼女をいかに自分のものとしているかの、いやもつと正確に言えば、私が、いわば、彼女をいか

に自分のものとすることに失敗しているかの、象徴そのものなのだ。アントウニアのほうは、自宅の階段の壁面を飾っているオードュボン（一七八五—一八五一。アメリカの鳥類学者。北米鳥類図鑑の著者）の鳥類図、初版の見事な一組を所有しているのとはほとんど同じ意味で、私はたしかに自分のものになっている。私はジョージを所有していない。ジョージはただ目の前にいるだけなのだ。

ジョージは、靴下を履き終ると、安楽椅子に背をもたせかけて、私を見上げた。豊かな黒髪の彼女は、明るい薄い灰色がかった青い目をしている。顔の幅が広く、繊細というより、逞しい。しかし、驚くほど白い肌は、象牙のようにしっとり輝いている。彼女のはてしない嘆きの種であり、私の喜びの種である鼻、彼女が睨さえあれば、つまんだり、さすったり、何とか驚鼻にしたいと無駄な努力を重ねている大きなやや上向きの鼻。いま彼女がさすことを忘れ、顔に鎮座しているその鼻が、彼女を何かに気を奪われた動物めいて思わせ、鋭利な聡明さをやわらげていた。香の充満したうす暗がりの中で、彼女の顔には沢山の曲線と陰影が浮んでいる。しばらくの間、われわれは互いの目を見つめ合った。情念に新たな息吹をふきこむような、このもの静かな凝視は、他の女たちの場合には経験したことのないものだった。アントウニアと私ではこのように凝視しあうということが決していない。アントウニアにはこれほど長くじっと見つめるということができない。暖かく、包容的で、コケティッシュな彼女は、自分を曝けだすことを決してしない。

「河の女神」と私はおもむろに言った。

「商人の王子」

「ぼくが好き？」

「うん、気が狂いそうなほど。私が好き？」

「愛してる。限り無く」

「違う」とジョージは言った。「そうじゃないわ。あなたの愛情は、大きくはあるけど、限界があるんだわ」

何を指しているか二人とも知っている。しかし、論じても益のない問題があるのだ。それもまた彼女にも私にもわかっているところだ。妻を捨てることはできるわけがない。

「思慮分別なんか失くしてしまえというのかい？」と私は言った。

ジョージはなお私の凝視を受けとめている。翳りのない聡明さゆえに、彼女の美貌が銀鈴のような響きを発するのは、こういうときだ。やがて、くるりと向きを変えて、私の足に頭をのせ、長々と体を横たえた。ぼくには、これほどすべてを任せきった態度で、足下に自分の体を投げ出せる人間が一人としていない——彼女の忠順な心根を噛みしめながら、一瞬、私はそう思った。私は、膝を折って、腕の中に彼女をすくい上げた。

ややあって、互いに接吻を貪り、煙草に火をつけると、ジョージは言った。「あの人はお兄さまを知っているわよ」

「だれが？」

「オナー・クラインよ」

「まだ彼女のことを考えているの？　そう、知っていると思うね。メキシコ美術展のときに、委員会か何かで顔を合わせたことがあるはずだ」

「いつお兄さまに会わせて頂ける？」とジョージは言った。

「ぼくからは絶対に紹介しないよ」

「あなたの女の子をいつもお兄さまに廻すんだって、いつかおっしゃったわね。お兄さまが自分では愛人を見つけれないから」

「そうだったかね。でも、君は絶対に廻さないよ」無分別にもそんなことを言ってからというもの、兄のアレグザンダーが、私の情婦ジョージのロマンチックな空想の対象となっていたのだ。「お会いしたいといつても、あなたのお兄さまだからよ。兄弟姉妹というのが私には懂れなのよ。自分にいないから。似ていらっしやる？」

「そう、少しはね」と私は言った。「リンチ・ギボン家の人間はみんな似たところがあるんだ。兄貴は、ねこ背であんまりハンサムじゃないがね。なんなら妹のロウズマリーを紹介しようか」

「妹さんにはお会いしたいと思わない。アレグザンダーに会いたいだよ。ニューヨーク旅行とおんなじに、しつこくせがみますからね」

ジョージはニューヨークを見たいと寝言にまで言っていた。じつのところ、この秋、商用でニューヨークへ旅行した際に、連れて行くに甚だ軽率にも約束したのが、アントウニアに大きな嘘をつかなければならないと思うと良心が疼き、というより勇気が挫けてしまい、最後の土壇場になって約束を反故にしたことがあったのだ。そのとき、ジョージは、まったく見たことがないほど、激しく、露骨に、失望の色を示したものだ。そこで、次の機会にはとあらためて約束しておいたのだ。

「そううるさくいわなくなつてわかっていますよ。そのうち、一緒に行こう。ただし、自分の旅費は自分で出すなどとはかなことをもういわないという条件でだよ。不労所得はけしからんといつもいつてゐるじゃないか。少なくとも、筋道の立つた計画に、ぼくの金を使わせてくれたっていいだろ

う？」

「そもそもあなたが商人だということがおかしいのよ」とジョーギーは言った。「利口すぎるわ。学者になるべきだったのよ」

「学者でなければ利口じゃない、と思っているのかね。君も女史におさまりかえったものだ」私は彼女の脚を愛撫した。

「あなたは歴史の最優等で卒業なさったんでしょう？　それで、アレグザンダーは？」

「二等。ほら、これで君の眼中におく必要がないのがわかったろう？」

「でも、実業界にはいるような無茶はしなかったわ」とジョーギーは言った。兄は才能のある、また著名な彫刻家なのだ。

学者になるべきだったというジョーギーの意見は、半ば私の気持でもあった。思い出せば胸の疼く問題でもあった。父は、リンチ・ギボン・マックケイブ合資会社の創設者で、葡萄酒商として成功した。父が死んで、会社は二つに分れ、大きいほうの部門がマックケイブ家の手に残り、もともと祖父が手がけていたクラレット（フランスのポル
ド・産赤葡萄酒）関係の小規模な部門を私が経営するようになったのだ。私が商売から脱け出せないのはアントウニアのせいもある、とジョーギーが、はつきりとはいわないが、信じているのも私は知っていた。彼女の推測はあたらないわけでもないのだ。

しかし、これだけは話題にしたくないものだったし、兄のことからも話をそらしたかったので、私は「クリスマスはどうして過すつもり？　ほくは君のことを考えていることにするよ」と言った。

ジョーギーは顔をしかめた。「そうね、大学の人たちと出掛けることになるでしょう。盛大なバ

「ティーを開くわ」彼女はつけ加えた。「あなたのことなんか考えたくない。あなたのほんとうの家族じゃないってことが、こんなときには変につらく感じられるんですもの」

それには答えずに、私は言った。「アントウニアと静かな一日を過ごすつもりだ。今年はロンドンにいてどこにも出掛けない。ロウズマリーはレンバースの兄貴のところへ行くだろうが」

「聞きたくないわ。わたしと一緒にでないときにあなたが何をするか聞きたくない。想像力を刺激するようなことは聞かないほうがましなんだわ。あなたがここにいらっしやらないときは、あなたという人がいないものと思いたい」

実際、私自身もそういう考え方をしているのだ。私は彼女のそばに横たわり、美しいアクロポリスの足と私が呼んでいる彼女の足を握った。うすい青色の靴下越しに、地肌がわずかに透けて見えた。編んだ髪が、重い綱のように、乳房の間に垂れている。彼女はほつれ毛を乱暴に耳の後へかき上げた。頭の恰好がじつに美しい——そうだ、アレグザンダーに彼女を絶対に会わせてはならない。私は言った。「ぼくはすごく運がいい」

「すごく安全だと言いたいでしょ？ ええ、そうよ、あなたは安全よ。いまいましいたらない」

「危険な関係リシジョンズ。しかも、ともかく、ぼくたちは危険の外にいるんだ」

「あなたはそう」とジョージは言った。「アントウニアにわかったら、わたしなんか熱いじゃがいもみたいにはうり出すくせに」

「ばかなことをいっちゃいけない」と私は言った。しかし、そうしないとは限らない。「わかりつこないさ」と私は言った。「わかったところで、ぼくが何とかする。ぼくには唇がかけがえのない

人なんだから」

「だれにしろ、かけがえのない人なんているものじゃないわ。そら、また時計を見ようとする。いいわ、帰らなければならぬんなら、お帰りなさい。途中の元気づけに一杯いかが？ ニュイ・ド・ヤングを開けましょうか？」

「クラレットは、栓を抜いてから少なくとも四時間おいてからでなければ、飲んでいけないと何遍言ったらわかるんだね？」

「勿体ぶらなくたっていいじゃない。わたしなんかには上等品だろうと何だろうと、ただのお酒にすぎないんだから」

「野変人だね」私は情愛をこめて言った。「ヴェルモットを入れてジンをくれないか。飲んだら、ほんとうに帰らなくちゃ」

ジョーシーはグラスを持って来た。私たちは燃えさかるストーブの前に坐つて、美しいネットケのように抱き合つた。地中の部屋にいるみたいな気がした。人里遠く離れ、垣根をめぐらした中に、ひっそり忍んでいるような気がした。すばらしい安息の一時だった。このとき、私は、これが最後の、ぎりぎり最後の安息の瞬間であることを、また無邪気に振舞えた世界の終りであることを、この先の頁が物語る悪夢に跳びこむ前の、のんびきならない最後の瞬間であることを、知らなかったのである。

私は、彼女のセーターの袖をたくし上げ、腕を愛撫した。「なんてすてきなんだ、人間の肉体と
いうのは」

「いつお目にかかれる？」とジョーシーは言った。